

遺品整理業 依頼は年1800件

再生のとき

3

「私の遺品、整理してもらいませんか」
 昨年、吉田太一さん(45)の会社に見知らぬ男性から電話が入った。翌日かけ直す、男性は自殺願望を口にした。「死ぬつもりです」「死ねばいいです」「いっぺん会いませらん」。意外な申し出に男性は一瞬黙し、「は」と答えた。

一週間後、渋谷駅前。「吉田さん?」。振り向くと野球帽の男性がいた。60代後半か。大通りに面した喫茶店に入った。居酒屋の経営に行

き詰まり、借金の返済に迫られていること。離婚して障害のある息子と2人で暮らしていること。親族との縁は切れたこと……。男性はぼつぼつと語った。

「また、ご飯食べに行きましようよ」。別れ際、そう持ち掛けたが「もういいんです。迷うといけないので。結局、名前も住所も聞けなかった。雑踏に消える背中。肩から斜めに提げたカバンが重そうだった。」

◆そのとき日本は◆

- 95年1月17日 阪神大震災。発生から数カ月後、仮設住宅で独居被災者の孤独死が相次ぐ
- 98年7月1日 警察庁のまとめで、97年の自殺者数が3万2863人(前年比8472人増)に。以降、毎年3万人台で推移
- 01年9月 ルポライターの岩下久美子さんがエッセー「おひとりさま」(中央公論新社)を出版
- 05年11月 「おひとりさま」がユーキャン新語・流行語大賞の候補に
- 06年10月31日 05年国勢調査の確定値発表。単身世帯が115万1774世帯(32.1%)と、夫婦と子供からなる「標準世帯」を初めて上回る
- 07年度 都市再生機構が管理する賃貸住宅77万戸で孤立死者が589人に。集計し始めた99年度207人の2.8倍

「孤立死減らす」講演



遺品を保管する会社の倉庫で「孤立死」について語る吉田太一さん
 福岡市東区のキーパース福岡支店で、金澤稔撮影

「天国へのお引越」をキヤッチフレンドに、吉田さんが全国の遺品整理会社「キーパース」(本社・愛知県刈谷市)を起こしたのは02年10月のこと。28歳で大手運送会社から独立し、大阪市で軽トラック1台の引越し業を始めた。ある日、見積もりに行った先で、親が残した遺品の始末に困る家族と出会った。核家族社会。離れて暮らしていた家族の遺品をどうしているか悩んでいる遺族は多いはず」。ビジネスになると直感した。

「客のSOSに100%以上応えて返すのがサービス業」。あくまで商売というスタンスで、東京、大阪、福岡に支店を広げた。

「世のため人のため、という立派な考えやない」。そう話す吉田さんは、しかし最近、孤立死を減らすための活動を始めた。現場の悲惨さを目にするたび、やり切れないが募ったからだ。

「30年近い引きこもりの末、自宅の離れで亡くなった男性は、半日後に母屋の母親に見つけられた」。この人は、こんな最期を迎えなかつたか。死に様は生き様か。そう考え、独居老人の孤立死を題材に、アニメDVDを制作した。近所付き合いを大切に「など、ちょっとした心掛けを説く無料DVDを小脇に抱え、年間40件近く全国を講演に回る。「倒れて1週間して、まだ誰にも気付かれない自分の姿を想像してみてください。嫌でしょ?」。参加者に呼び掛ける。

地縁、血縁に見守られた社会に戻ることが現実的に不可能だ。でもね、簡単なことなんです。長く連絡しなかった友達や親せきに電話してみろ。毎日2人以上とあいさつを交わす。「おひとりさま術」を身につければ済みます。孤立死がなくなればキーパースの仕事がなくなる? それが理想かもしれません」

【阿部周二】